

済州大学の ホヒャンジン総長二行が 表敬訪問

6月21日、済州大学校（大韓民国）のホヒャンジン総長、カンヨンフン国際交流センター長、イグアンマン工学部長、カクヨンスク医学部長、カンチョルウン工学部副学部長が片峰茂学長を表敬訪問しました。

一行は、6月21日から23日にかけて本学で開催される



ホヒャンジン総長一行と本学関係者

「第11回長崎大学・済州大学校科学技術共同シンポジウム」に出席するため、来学されたものです。

片峰学長との懇談には、本学側から清水康博工学部長、石松隆和工学部教授、チョンビヨンドク教育学部教授らが出席し、共同シンポジウムのセッションの概要説明や両大の間ダブルデイグリーの実現に向けての具体的な調整などについて意見交換が行われました。

国際原子力機関（IAEA） ヒューマンヘルス本部長が 片峰学長を表敬訪問

8月10日、国際原子力機関（IAEA）ヒューマンヘルス本部のRethy Kieth Chhem部長が片峰学長を表敬訪問しました。

同本部長は、IAEAと長崎大学との新たな連携の協議のために来学されたもので、片峰学長との懇談は、本学医歯薬学総合研究科の山下俊一研究科長を交えて、国際原子力機関の紹介や意見交換などが行われました。懇談の最後には、「Nagasaki people

have the moral authority to advocate a world without nuclear weapons and to promote a peaceful world.」(長崎の人たちは、核なき世界を提唱する道徳的権威とともに、平和な世界を実現する大きな力を持っています。)とのメッセージも託されました。



(左から)片峰学長、Rethy Kieth Chhem部長、山下研究科長

原爆犠牲者 慰霊祭を挙行

8月9日、原爆犠牲者慰霊祭が、医学部記念講堂において開催されました。同慰霊祭は、原爆死没者教職員と学生897人の御霊を慰めるため毎年実施されており、被爆65年目となる今年

員ら約350人が出席しました。

はじめに松山俊文医学部長から、「私たちがするべきことは、原爆の被害者の姿を、そして言葉で綴る多くの被爆体験を風化させずに広く世界へ伝え続け、被害者の顔が見えるようにすることです。」と式辞が述べられ、原爆投下時刻の午前11時2分に、参列者全員で黙祷を捧げました。

また、原爆投下当時、長崎医科大学に在学中であった築城クリニック(長崎市)の築城士郎院長から、当時の惨状を追想するお話をいただいた後、参列者全員による献花が行われました。



式辞を述べる松山医学部長



被爆時の惨状を語る築城氏



参列者による献花

つづいて、国際ヒバクシャ医療活動に尽力する山下俊一教授から、故秋月辰一郎先生の「死の同心円」を引用して、原爆の実相についての講話が行われました。最後に、ご遺族を代表して角尾澄夫氏からご挨拶をいただき、慰霊祭は終了しました。



講話をする山下教授



ご遺族代表の挨拶を述べる角尾氏